

神道六教派特立百三十年記念事業

記念式典

平成二十四年六月五日（火）
於 國學院大學 常磐松ホール

【開式】

司会 本日は、ご多忙の中、ご列席いただき誠に有難うございます。

ただいまより、「神道六教派特立百三十年記念式典」を開催致します。

私は本日の司会進行をつとめさせていただきます本記念事業事務局の長村でございます。よろしくお願い申し上げます。

なお、撮影に関しましては、プレス・記録のみとさせていただきます。個人での撮影・録音などはご遠慮くださいますよう、お願い申し上げます。

【国家斉唱】

司会 国歌斉唱。

式典に先立ちまして、国歌を斉唱を致します。

おそれいりますが、ご起立くださいます。前奏に続いてご唱和ください。

【三條教憲奉読】

司会 続いて、三條教憲を奉読致します。神習教 芳村正徳教主お願い致します

芳村正徳教主

三條教憲

- 一、敬神愛国の旨を体すべき事
 - 二、天理人道を明かにすべき事
 - 三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事
- 以上

司会 ご着席くださいませ。

司会 出雲大社教、神道扶桑教、實行教、神道大成教、神習教、御嶽教の神道六教派は明治十五年五月に特立を受け、本年、特立百三十年の記念すべき年を迎えました。

今より百三十年前と申しますと明治初期でございますが、時代の変革期にありまして、当初、明治政府は教導職を制定し、神官、僧侶などの合同布教により、民心の安定を図ろうとしました。

しかし、明治政府の方針転換などによりまして、教導職は廃止されることとなり、また神社非宗教論による「神官教導職分離令」によりまして、神社の神官による布教が禁じられたため、布教の道を選ぶか、神社の神官として祭祀専一の道を選ぶか選択を余儀なくされました。

そこで、それぞれの教派の開祖は、自らの信ずる道こそが世を救い人を助ける道であるとの信念から、当時は神宮教を含む七教派でございましたが、明治十五年五月に別派特立することとなり、以来、各教派にあっては立教の精神を護り、日本古来の信仰を祈り継いで参りました。

【六教派代表による教派紹介と挨拶】

司会 ここで、特立百三十年という記念すべき節目の年を迎えました六教派の代表者より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

出雲大社教 千家活彦東京出張所所長より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

千家 出雲大社教東京出張所所長 千家活彦でございます。本来ならば出雲から千家達彦管長が登壇の上、ご挨拶及び本教の紹介を申し上げますべきでございますが、高齢でございますまして、また、八月の六日七日に齋行されます特立百三十年奉祝大祭に向けまして養生を重ねておりますので、代わりまして私が出雲大社教の紹介をさせていただきます。

本教は、出雲國造の祖である天穂日命を教祖に戴き、本教の宗祠である出雲大社の大國主大神を主祭神と仰いで、天御中主神・高皇産靈神・神皇産靈神・天照大御神・産土神の六神を奉斎致しています。天穂日命は、人々から親しみある大神として崇敬される根源をお定めになられ、歴代の國造によりお道が成されていきました。このお道を御師らの布教活動によって全国津々浦々に広まり、各地に出雲講や甲子講などがたちました。この講組織が、現在の出雲大社教の基礎です。

明治六年に第八十代國造 千家尊福 宮司が各地にあったこれらの講を組織的に統合し

て出雲大社敬神講を組織し、同年に出雲大社教会と改称します。

教義としては、目に見える世界を顕世といい、靈魂の世界であり、目に見えない世界を幽世とし、この顕世と幽世との世界は、表裏一体の關係にあり「幽顕一如」として顕世での緒現象は、幽世の恩頼により行われており、その幽世を主宰されているのが大國主大神ですから、生死一つながらの「幽顕一如」の道を歩むところに安心立命があります。

尊福は、こうした教義の布教活動を全国的に展開しました。しかし、明治十五年に「神官教導職分離令」が施行され、神官の葬祭関与が禁止されるようになりました。この機におよんで尊福は、布教の重要性を意識し、出雲大社の宮司として神徳布教の限界を察知しました。自由な立場で「幽顕一如」の道、大國主大神の「和讓」の御心、また人として在るべき姿の「敬神崇祖」を礎にしている活動を展開すべく、出雲大社の宮司職を弟に譲り、布教活動に挺身しました。そして、同年五月に一派特立の認可を得て、神道大社派と教名を改称し、初代管長に就任しました。以後、神道大社教―出雲大社教（いづもたいしやくきょう）―出雲大社教（いづもおおやしろきょう）と改称し、管長職は千家國造家が襲職して、現在に至っています。

本教においても八月に特立百三十年祭を斎行致します。この特立百三十年祭は、翌年に控えています出雲大社 平成の大遷宮 本殿遷座祭の前年祭としての意味を併せもっていますので、出雲大社にとっても大事な年となっています。

司会 続きまして、神道扶桑教 杉山一太郎管長より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

杉山 神道扶桑教の第五世の管長の杉山一太郎でございます。本日は、こういう機会をいただきまして、誠にありがとうございます。私ども扶桑教と申しますのは實行教さんと同じご開祖、藤原（長谷川）角行東覚様によって開かれてまいります。

もともと扶桑教は富士信仰、富士講を、その基といたし、天文十年一月十五日にご出生されました藤原角行東覚様によって開かれます。このお方が一番初めに拜む神様を「元の父母様」と申し上げます。天地すべてをおつくりになられた大本の親神様だからということでございます。その後、神道扶桑教として特立を許されるころに初代管長宍野半により元の父母様は天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、この三柱をもって天地創元の三柱の神様ということで、大祖參神と唱えさせていただきます。

また、扶桑教におきましては、代々より角行様のご意思を尊重いたしまして、すべてのものを元の父母様からいただき、それをみんなのために尽くさせていただきます。すなわち「天地の平安、万民の安福」を心願といたしております。これを心願といたしまして、御開祖角行様が御年十八歳、今でいえば高校生の終わりぐらい、そのときにこの道、富士信仰の道をお開きくださいました。

実際、角行様が本当のお力をいただくのが、これから十四ヶ年かかって、富士山頂にお立ちになればそのお力をいただきます。富士山頂において天を拜むとき、角行様は、富士山そのものを尊ぶのではなく、もちろん富士山そのものも信仰の対象でございますけれども、この天と地を結ぶ御山こそが大きいお力をお授けくださるということから、富士山を天地結霊の真の御柱としまして、ここにお道を伝えられてまいります。

そのお道と申しますのはすべての根源は元の父母から授かることで私たちは生かされているという教えであります。私たちはそれを受け継ぎながら今も一生懸命そのお道に尽くさせていただいております。

そして、角行様は「他のために祈れ」と私たちに強い意思を遺されました。私たちは他のためになるために、ただ一生懸命にこの道を尽くさせていただきたく思います。どうぞ、皆様方におかれましても、この道に一步一步を歩ませて頂いています扶桑教への更なるご理解を賜りますよう心からお願ひ申し上げます。ありがとうございました。

司会 続きまして、實行教 柴田尋之管長より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

柴田 實行教六代管長柴田尋之と申します。よろしくお願いいたします。

明治十一年、佐賀出身の柴田花守が富士講の一派である不二道を神道化し、實行社を結成した。これが實行教の始まりとなります。初代管長として、今日の實行教の礎となる教義、教え歌などを遺されたことがご偉跡でございます。

2枚目の左側が、先ほど扶桑教様もご紹介いただいた我々も同じ道祖とあがめております長谷川角行靈神、右が五世の伊藤食行身祿靈神となります。この道祖から数えますと、私は富士道統の十六世に当たります。

不二道の道祖とあがめております長谷川角行靈神は戦国時代に生まれ、民衆の苦しみを救い、戦乱が収まり、平和の世を築くべく諸国修行の旅をしていました。富士山の麓、人穴で修行されたことが言い伝えられております。また、修行により御神語を感得し、人々に伝えたと言われております。

伊藤食行身祿靈神に關しましては、富士講の開祖となっておりますけれども、不二道統では五世というふうに實行教では言っております。不二道の基本理念に当たる人間平等・男女平等などを唱えまして、封建社会の変革を予言し、書に著し、後世に伝えたので、實行教では中興の祖としてあがめられております。

これが二代管長となります柴田禮一で、明治二十六年アメリカシカゴで開催された第一回世界宗教者会議で日本神道界から唯一出席したとなっております。柴田禮一は、本教の説明と世界連邦の構想を発表しました。この運動は現在も続いていると伝わっております。また、日本に戻ってから教派神道のもの設立にも尽力したとなっております。

實行教の御教えとなります。扶桑教様は大祖參神とありましたが、實行教では天祖參神と申しまして、これは「あまつみおやもとのちちはは」と言っております。その天祖參

神を信奉します。

富士山は、「神霊かんみたまの分霊わけみたまの鎮座みますところ」となっております。

実行を重んじ、空理・空論を排すること。来世に期待するのではなく、現世を重んじるということになっております。

神の御心である人の守るべき不変の道を歩むこと。そして、加持祈祷に頼らず、実践躬行を旨とすることとなっております。

この写真の左は、現在の御神殿の前の御神殿となります。昭和二十年に、東京の本庁は戦災により灰塵に帰しまして、その後埼玉県大宮に越しました。現在は、さいたま市となっております。現在の御神殿が右側となりまして、平成二年に完成いたしました。全国からの御寄進をいただきまして、完成することができました。

実行教の今後です。基調講演にもありましたように、二十一世紀の実行教ということ、このように考えております。二十一世紀の実行教には、多くの課題があると思いますけれども、まずは本庁自体を改革し、また地方の教会との連携を強化していくことが必要と感じております。

以上となりますが、実行教の説明を終了いたします。ご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。

司会 続きまして、神道大成教飯田典親管長より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

飯田 神道大成教第十六世管長飯田典親でございます。まずもって、私ども大成教の教祖平山省齋についてご説明させていただきます。

平山省齋は、一八一五年福島県三春に生まれました。一八六八年、明治元年大政奉還がなされるまでの二十数年間鎖国の中での外交官として、諸外国との交渉をしてまいりました。明治元年、大政奉還により十五代徳川慶喜將軍のもとで外国総奉行若年寄として、最後の幕閣としてご一緒いたしました。静岡に蟄居を申しつけられました。その間に禊教の開祖であります井上正鉄先生の禊教を勉強いたしました。明治十二年に大成教会を設立いたしました。

その間、明治六年には大宮氷川神社の大宮司、また山王日枝神社さんの神主としてお勤めをしました。明治十五年に特立をいただきまして、大成派管長としてどちらを選ぶかということ、神社神道を捨て、教派神道でそれぞれ皆様を教化、育成していこうというかたちでスタートしました。五十四歳のときです。

明治二十三年五月二十二日、七十八歳をもちまして帰幽いたしました。奥津城は井上正鉄先生の谷中の霊園のお隣に祭らせていただいております。

戦災により昭和二十年に完全に教務庁とすべてが焼失致しまして、焼けた後本当に大成教はこのまま終わってしまうのかというような状況の中で、昭和三十年十五世管長、諡は照山彦継道之命が湯河原の天照山神社を提供いたしましたして、こちらにご祭神、あるいは教祖平山先生、それぞれの管長、教師、信徒の御霊をそちらのほうに祭祀いたしまして、大成教の参拝すべき奥宮が天照山にできまして、中興の祖として天照山神社を提供いたしました十五世管長のもとに、細々ながらも今大成教を再生しようということによって現在に至っております。

この写真は、天照山神社は車の入れるところから三十分以上歩かないと神社に参拝できないということで非常に厳しく、参拝すること自体が修行の一つになっております。

先ほど写っていましたが滝につきましても、禊修行に教師をはじめ、信徒の方々が頑張つて禊を行っております。以上、簡単ではございますが、大成教について終わらせていただきます。ありがとうございます。

司会 続きまして、神習教芳村正徳教主より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

芳村 神習教の三世管長、初代教主の芳村正徳でございます。実は二十数分の動画を無理やり三分に縮めまして、非常に紹介しづらい動画になっておりますが、動画に沿ってご紹介をしたいと思います。

今出ておりましたのが、私どもの初代の教祖芳村正乗でございます。芳村正乗は、岡山県の蒜山のふもとで生まれました。医者の子で、当時は幕末ですのでいろいろと世間が騒がしくなってきました。勤皇の志士として京に上がって、勤皇の志士たちと交流を深めながら将来の日本を憂えて、どうすべきかということを考えていました。

その後明治維新になりまして、東京に上り、神祇官に勤めるようになりました。神祇官は、その後神祇省、教部省となっていきました。そのころ、伊勢神宮の禰宜として勤めることになり、これが明治六年でございます。明治六年に神宮の禰宜になりましたから、出納課長、常務課長、神宮支庁の東京出張所の所長などを経て、最終的には筆頭禰宜になりました。

出納課長としましては、明治十年頃に数十万円の負債があったそうです。それを三年間で償却したという功績が、現在でも残っているようでございます。

伊勢神宮を十二年に辞め、龍田神社の宮司などの辞令も出ていたようですが、ちやうどそのころに神官教導職の分離がありまして、神習教の立教に至ったわけでございます。神習教の立教の際に、伊勢神宮の禰宜として奉職しているときに倭姫命の託宣をいただいて、汝教を立てたときには「神習いの教えとせよ」ということで、教名を神習教といたしました。

また、当時の神宮の祭主でいらっしゃった久邇宮朝彦親王様より御自ら御魂様を分霊していただいた御神鏡を授かって、それが現在の私どもの本部の神殿の御神体となっております。

ります。

これが立教当時の、神習教の本祠大神神殿でございます。この前にありましたのが、神田に創建しました最初の神殿です。

これが、現在の神習教の本部です。教祖芳村正乗が帰幽しますときに、ご祭神様からご神託をいただきました。すぐに西に移転せよというようなことで、現在の世田谷区新町に移りました。大祭、中祭などではこれは火渡りと言いますけれども、鎮火式という御神事を行なっています。

この後出てきます、塩をまいていますけれども、夜に見ますと、結構赤いのです。昼間なので、そうは見えないですけど。一般の方にお渡りいただけるように塩をまいているところです。

これが御勤事御供式、釜鳴り神事でございます。大祭、中祭、その他、御祭儀のときには必ず行っております。

これは深湯式ということで、湯立て神事でございます。このように、煮立てた湯をこうして神職がかぶるということをやっております。

これは、教祖が帰幽しましたときの葬儀の様子です。立教するということになりましたから、神宮で奉職をしておりましたけれども、みずから直接神を知らなければということで、日本国内にあります霊山各所に単身で赴きまして修行に励みました。

食べ物もなくなり、行く場もなくなったようなときに白猿が出てきて、白猿に食べ物を恵んでもらって、それで救われたということです。この辺は、御嶽山で修行しているときの絵でございます。今日は御嶽教さんの方も見えていらっしやいますけれども、神習教には初期、御嶽講の方々がたくさん入ってくださいまして、地域では御嶽さんという呼び方で親しまれておりました。

これは、御嶽山の御嶽三神の分神をいただいて、それを東京に持ち帰るときの絵でございます。

二十数分の動画を、無理やり三分にまとめたものですからなかなか説明しづらい、また分かりにくいビデオとなってしまいました。神習教の教祖芳村正乗、現在の神習教に關しまして若干のご説明をさせていただきます。ありがとうございます。

司会 続きまして、御嶽教 村鳥邦夫管長より、ご挨拶及び教派のご紹介を申し上げます。

村鳥 御嶽教第十二代管長の村鳥でございます。スライドが自動で流れますので、順に説明させていただきますと思います。

御嶽大神と申しますのは国常立尊、大己貴命、少彦名命の三柱の大神様をご尊称して申し上げるところでございます。長野県と岐阜県にまたがります標高三、〇六七メートルの単立峰が信州木曾御嶽山でございます。ここを信仰の根本道場として修行に励んでおります。

ここが約三〇〇メートル級の八丁タルミというところでございます。祀られております真ん中が国常立尊、向かって右側が大己貴命、左側が少彦名命の三柱の大神でございます。その両横は開山靈神であります覚明行者、普寛行者、一心行者の像でございます。左上に見えておりますのが、頂上三、〇六七メートルの山頂でございます。

これは、頂上からの御来光でございます。山の天気というのはよく変わるものですから、御来光というのは夏山期間中三分の一ぐらいがきれいに見え、天気の悪いことのほうが多いということになっております。

これは、頂上の上から一の池、二の池、三の池、四の池、五の池という五つの池がございます。これは、二の池に残雪がのこっているところです。この写真は八月十日ごろに撮った写真ですが、まだ雪が深いわけでございます。水を山頂の旅館等々で利用して、貴重な水資源となっております。

七月一日に開山祭が行われます。これは、神事後の地元のアルプホルン同好会によるアトラクションでございます。鳥居のこの地点で標高二、二〇〇メートルでございます。ここまでは車で上がれます。これから先は、自分の足で歩きます。

開山祭の翌日に、ボランティアやわれわれ宗教者が集まりまして、登山の安全のために実際に登山道の整備をさせていただくという肉体労働をやっているところです。登り口の二カ所をするのですけれども、大体二百名ぐらいのボランティアが登山の安全のために作業しております。

これは、夏の清滝です。高さが、約四十数メートルございます。

要所々に祠があり、その祠で祈りを捧げています。左の少し上に石碑が見えますが、霊神碑と呼ばれるものです。御嶽山には数千の霊神碑が建っております。亡くなって、魂が山に還るということで、霊神になって祀られます。

これは、冬の御嶽山でございます。鳥居がだいぶ埋まっております。先ほどの滝が凍りますと、このようになたちになってきます。夏山と寒山の両方が修行ということで、特に冬は夏の行と違いました。山に神様が籠もられるから、その神様のお徳を間近にいただくことができる。また、寒風に身をさらしながら寒さに耐えて、自分を磨きあげるといふ修行でございます。

これは、四月十日の写真でございます。先ほどの清滝でございます。ちょうど四月十日ごろに雪解けが終わりまして、雪解け水を浴びているところです。水温は四度です。四度というのは、一説によると水の体積が一番小さい。凍れば体積が増える、温度が上がれば体積が増えるということ、四度が水が一番凝縮しているのです。滝行をするには四度が一番いいとされておりました。これは四度のときでございます。新聞社取材のときの写真でございます。

八月七日に、大御神火祭という火祭りを行っております。細かいものも含めると、約百万本の祈願の斎木の焚きあげをするわけです。現在も、頂上と麓の二元方式というところで、この御神火祭をしております。

私どもは、里の本宮と山の本宮がございまして、その大祭のときの写真でございまして、その御扉の中に御嶽三柱大神が鎮座されております。

これは、火渡りのときの写真でございまして、修験の流れがありますので、修験の格好をしております。

これは真剣刃渡りと言いまして、この刀は実際に切れる刀でございまして、これではしご段をつくりまして、その上に一歩ずつ登っていきまして、上でご祈禱をして、靈験あらたかな神様のお告げをいただいたという故事にちなみまして、このようにしております。実際に、足を切る方もおられます。横に行きますと、本当に足が切れるわけです。

これが、奈良県奈良市にあります里の本宮と言っております御嶽山大和本宮です。これが長野県の御嶽山の麓にあります御嶽山木曾本宮で、この両本部体制をとっているところでございます。ありがとうございます。

司会 以上をもちまして、特立百三十年を迎えました各教派代表者によりましてご挨拶とさせていただきます。

【共催団体挨拶】

司会 次に共催をいただいております國學院大學 赤井益久学長より、ご挨拶を申し上げます。

赤井 皆さん、こんにちは。ようこそ、國學院大學にお越しくださいました。共催者として、開式に当たり一言ご挨拶を申し上げたいと思っております。

本年は、教派神道教団の中核を担います出雲大社教、扶桑教、實行教、大成教、神習教、御嶽教の六教派が、神道事務局より別派特立を果たして以来、百三十年の時が過ぎました。その間、近代化、グローバル化の波により激しい変容を遂げた日本の社会の中におきまして、教派神道教団が神社界、そして本学とともに日本の伝統的な精神文化を支え、発信し続けてこられましたことに、衷心より敬意を表するものでございます。

顧みますれば、明治維新後政府は国民統合の柱として神道の布教を図り、大教宣布を起こしました。その過程において、国民に対する神道教化を担う組織として成立しましたのが、教派神道各派でございました。

一方、国家の宗祀としての神社宗祀は神社界が、学問、研究、教育を國學院が担うというようになりました。いわば、神道、国学が有しておりました祭・教・学の要素が明治以降に分離され、それぞれ神社界、教派神道界、國學院が分け持つことになった次第でございます。

換言して申せば、神社界、教派神道界、そして國學院大學はともに国学という共通の根を持つ同胞であるということができると存じます。加えて申せば、六教派の特立した明治十五年、本学の設立母体となりました皇典講究所が神道事務局の生徒寮を基に創立さ

れております。いわば、本学と六教派はともに百三十年の歴史を閲し、こんにちまで営々として伝統を伝えて参ったわけでございます。

明治以降、教と学が分離されたとはいえ、この百三十年間、教派神道界と國學院大學が全く異なった道を歩んだわけではございません。例えば扶桑教を組織した宍野半先生は皇典講究所の創立に深くかわわれ、大成教を組織された平山省齋先生や出雲大社教の千家尊宣管長は、本学で教鞭を執られておりました。

また、本日お見えの神習教教主芳村正徳先生をはじめ、多くの教派神道の管長や教会長が國學院大學で学び、神道教化の道に当たられました。

さらに、昭和二十四年から四十一年にかけてまして、教派神道連合会の委託により、國學院大學が開催いたしました教派神道教師のための講習会神道講座におきましては、御嶽教や實行教をはじめとして、述べ一、六五一名の各教派の教師が國學院大學で研鑽を積まれました。

このように、國學院大學と教派神道界は明治以降密接な人的、学門的交流を持ち続けております。言うなれば、教化を担う教派神道界に対して、本学は教育、学術面において少なからずお役に立てたのではないかと考えております。

神道六教派の特立、そして本学の創立から百三十年を迎えたこんにち、われわれはこの日を祝い、来し方を振り返るとともに、次の百三十年の行く末に思いをいたさなければなりません。

とりわけ、昨年三月に発生いたしました東日本大震災以降、日本の国柄、日本人の心の在り方が問われているように思います。混迷を深め、動揺を続ける現在の日本の社会においてこそ、日本文化の基層となります神道の普及は吃緊の課題であると考えています。

六教派を中心といたします教派神道界の責務は、ますます重大であると申せましょう。同時に、本学におきましても建学の精神である神道精神にのっとりた教育力並びに研究力の一層の充実、向上を図りまして、教派神道教師ならびに信徒子弟の育成を行い、また、学術研究を通じて教派神道界の知的バックボーンとして協力できればと考えております。

神道六教派特立百三十年事業開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は誠におめでとうございました。

【来賓祝辞】

司会　ここで、本日、ご多用の中、ご臨席賜りました皆様を代表して、ご祝辞を頂戴いたしたく存じます。

まず、神社本廳総長 田中恆清様より、ご祝辞を賜ります。

田中様は公益財団法人日本宗教連盟理事でもあり、世界連邦日本宗教委員会会長でもございます。田中様よろしくお願いいたします。

なお、主催者着席のまま、ご挨拶させていただきますことをお許し下さい。

田中 ただいまご紹介にあずかりました神社本廳総長の田中でございます。全国八万の神社を包括する宗教団体として、本日の神道六教派の特立百三十年のお祝いの席にお招きをいただきましたことを心から感謝を申し上げる次第でございます。

ただいま六教派のそれぞれのご代表の方からご紹介がございましたように、まさに神社神道とは兄弟姉妹の関係にあるということを今日はつくづく感じさせていただきましたところでございます。それぞれ信仰の道を立てられて、多くの信者の方々を導いてこられ、この国の安寧のためにお尽くしをいただいていた百三十年の六教派の皆さん方のご努力に對しまして、心から敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

ただいま赤井國學院大學学長さんからのお話がありましたけれども、本年は私たち神社界にとりましても、皇典講究所設立百三十年という節目の大きな年を迎えています。有栖川宮様の御令旨を奉じて設立された皇典講究所であります。その冒頭には、「凡そ学問の道は本を立つるより大なるはなし。故に国体を講明して以て立国の基礎を鞏くし」云々とございます。このことを、今私どもはしっかりと確認をする時代ではないかと思ふように思ふ次第でございます。

今回の東日本大震災で大きな災害を受けられてお亡くなりになられた方、あるいは被災されて今なお不自由なご生活をされている方々の心の安寧や将来への希望を導いていくのは、私ども宗教者の役割ではないかと思ひます。そして、その役割は伝統に裏づけられた役割でなければならぬと思ふのです。

百三十年を迎えられた六教派のますますのご健闘こそが、私どもの日本の将来を大きく導いていただけたと思ひます。これからも、皆様方、信者の皆様方とともに手を携えて、さらには私ども神社神道ともさらなる交流や親睦、いろいろな意味で手をつなげていただいて、これからのわが国の発展のためにも力を尽くしてまいりたいと決意を新たにいたしましたところでございます。

本日の特立百三十年、心からお祝いを申し上げます。今日お集まりの皆様方のご健勝、わが国の将来がいよいよ明るいものでありますように、ともに力を尽くしてまいりたいと思ふ次第でございます。簡単粗辞でございますけれども、本日の式典に際しまして、神社本廳を代表しての私の挨拶とさせていただきます。本日は誠におめでとうございました。

司会 田中様、有難うございました。

【来賓祝辞】

司会 続きまして、新日本宗教団体連合会理事長 岡野聖法様よりご祝辞を賜ります。

岡野様は、公益財団法人日本宗教連盟理事でもございます。岡野様、よろしくお願ひ致します。

なお、主催者着席のまま、ご挨拶させて頂きますことをお許し下さい。

岡野 本日は、神道六教派特立百三十年記念式典がこのように盛大に行われましたこと、誠にめでたうございます。

先ほどは、「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」と題されました公開シンポジウムにおきまして、井上順孝先生の基調講演をはじめ、芳村正徳先生、村鳥邦夫先生のパネリストとしてのご講演を拝聴させていただき、また、ただいま六教派の先生方のお話を拝聴させていただきまして、改めて日本人として、そして信仰者として心に置くべき大切なことを学ばさせていただきました。語られた事柄の重み、深さに感動し、今感謝の念でいっぱいであります。神道六教派の皆様が父祖の教えに従い、百三十年という長きにわたって活動され、守ってこられましたものは敬神崇祖、神を敬い、祖先を崇び、天の心を地に敷くという古来日本人が最も大切にしてまいりました日本精神の核となるものと拝察されます。そして、それこそが現代日本の繁栄の基となり、日本を救う大きな力であると私は信じてやみません。

ご承知のとおり、今年の東日本大震災から一年三カ月が経ち、被災地の復興には今なお問題が山積しておりますし、原発事故による人々の不安は日を増すことに大きくなっている状態であります。諸外国から日本は大丈夫かと危ぶまれるほど、日本の再建には大きな困難が横たわっています。それでも遅々とした歩みであり、時として焼け石に水のような無力感に襲われながらも、政治・経済・医療・教育・建築道具などをさまざま分野で懸命なる努力が続けられております。五年十年と時間がかかるでしょうが、日本人の底力をもってすれば、必ずや被災地に豊かな緑が蘇り、港に、町に活気が戻ることも夢ではないでしょう。

ただ、それほどの時を待てないのが被災者の皆さんの心の問題でありましょう。今、なお大切な家族を失った悲しみから立ち直れず、幽霊がいる、水たまりに多くの目玉が見えたとおびえる方々の気持ちを変えるのは何でしょうか、誰でしょうか。一瞬のうちに世を隔ててしまった犠牲者の御霊は現界と霊界の間をさまよっているのではないのでしょうか。いつになったら、安霊のときを迎えるのでしょうか。このような時にこそ、私たちは宗教者としての本来の使命を再確認し、仁愛と市井の救済力を大いに発揮していきたいものであります。

昨春秋、仮設住宅に住まう方々に、「これから寒くなるが、何か必要なものはないか」と尋ねたところ、しばらく考えてから、「神棚が欲しい」と答えていたのをテレビのニュースで見ました。やはり日本人は伝統的に神仏の御加護があつてこそ日々の暮らしを信じ、親、先祖を敬愛し、子や孫を慈しみ、愛し、周囲の人々と仲良くし、鳥獣虫魚樹木草一切の生命のおかげでみずからの生命が保たれていることへの感謝、つまりあらゆるもののおかげさまで生かされて生きていることに感謝と報恩の心をもっているのだと感じました。

教派神道の皆様方、また本日お集まりの心を寄せ合う皆様方、被災地に心の豊かさを蘇えさせることができるのは、皆様方が長きにわたって培ってこられた誠の信仰であり、慈悲大愛であり、高い日本精神です。これからも、新しい日本の再建のために神道六教派百三十年の歴史に刻んでこられた揺るぎない信仰と、愛国の大精神を大いに発揮されるよう念じてやみません。

私ども新宗連も宗教協力の推進と、信教の自由の堅持を柱に、世界平和の実現と人類福祉の増進を目指して活動してまいります。ともに手を携えて共存共栄、よりよい幸せな世の中を築いていこうではありませんか。神道六教派のますますのご発展と、皆様方のご健勝を心からお祈りいたしまして、本日の私のスピーチとさせていただきます。ありがとうございます。

司会 岡野様、有難うございました。

【後援団体・教派神道連合会を代表して祝辞】

司会 続いて、本記念事業に後援もいただいております教派神道連合会を代表致しまして、公益財団法人日本宗教連盟顧問 禊教教主 坂田安義様よりご祝辞を賜ります。主催者着席のままご挨拶させて頂きますことをお許し下さい。

坂田 本日、神習教、神道扶桑教、實行教、出雲大社教、神道大成教、御嶽教の神道六教派が明治十五年五月教派特立されてより、百三十年の佳年を迎えられ、そのことを祝して記念事業を起こされ、記念シンポジウムの公開開催に引き続き、ここに記念式典が開催されますこと、常に一つ絆の中に使命を共にし、時代を等しく歩んでまいりました教派神道連合会を代表して、心よりお喜びの言葉を申し上げますと存じます。

こんにち、日本の近代、現代の歴史を通観いたしますとき、私たち日本は二つ、すなわち二回にわたる文明開化を実践し、体験してきたように思います。一つは、言うまでもなく、明治維新であります。黒船来航を契機として、江戸幕府の長きにわたる鎖国時代を終え、尊王攘夷の論を超えて国を開き、和魂洋才の心を肝に据えて、西欧文明、なかならずその科学技術を貪欲に吸収して、西欧化の一筋道をひたすらに歩み進んで、列強に比する国力と新しい国ぶりを築き上げてまいりました。この第一の文明開化のぶれることなき、和魂洋才の柱を担ってこんにちの神道六教派の特立を嚆矢とする教派神道十三派が誕生しました。

「神道は、天地自然を教典とするいのちの信仰」と言われます。芽吹き、春、茂る夏、実りの秋、休息にも似た雪降る冬の静けさ、その日本の自然の営みの深奥にこそ神が宿り、神が働きたもう遠く縄文の森に暮らした日本民族の感性が悟りといったいのちの真実の世界のことわりであります。

その天地の法を連綿と暮らし伝えてきた日本の伝統精神、すなわち和魂を日本の古典

に語り伝えた神話と祈りの国出雲、また神宿る日本の自然の象徴たる富士御嶽の山々に営み伝わる心の伝統、また国学、儒学、道教等に根を下ろした儒士、道士たちの営んできた道統、それらは、教派神道、特立教派にその和魂の行く末を託して、明治維新に始まる第一の文明開化は進められました。

その行き進んだところは、やんぬるかな、大御心、また多くの国民の願いに逆ろう、半世紀を超える戦争と無条件降伏という敗戦でした。しかし、ここから軍備を捨て、恒久平和を目指して経済と産業を基盤とした民主主義を謳歌して、平和国家の建設を目指した、こんにちなお、戦後という、これぞまさに第二の文明開化の時代が始まりました。そして、再び西欧先進諸国を超えて、戦勝国アメリカと肩を並べる、今や平和すぎるほど平和な経済大国になりました。

気づいてみれば、日本そして日本人の今、私たちの心には、グローバルと言われるあらゆる現実に境なき時代を生きる、存在感のもとこそなる日本人として、日本の国としての自己、個性、すなわち和魂の喪失した、精神の空洞化した空虚な現実にわが思いを失います。

いまだ過去の戦争に対する悔恨と三百万人を超える戦争犠牲者を国として、民として、正当な弔いもせずにいるやましさを心に抱えて、現実のいらだつ壁と向かい合う日本の今に、悄然として心に通る寒さを感じます。その中に起こった東日本大震災を機として、今日日本の真の復興が「日本がんばれ！」の世界の声の中に期待されています。

あゆみこし、近代、現代の歴史を反芻して、教派神道の創始の使命を思い起こし、私たち日本に和魂、そして今や洋才ではなく、日本文明とこそ言わん、和才をこそわれわれの肝に据え直した「和魂和才」の日本の復興を、全人類を引き連れて、恒久の世界平和を希求する第三の文明開化に向かって歩みを進めるときと痛感いたします。

こんにち、特立百三十年の佳年を迎えた教派神道嚆矢の御六教派の維新以来の伝統を踏まえて、日本再生と世界平和に向かっての力強い先進の導き役をここに改めて期待し、各御教派のさらなる御隆昌を心からお祈り申し上げ、誠に粗辞ながらお祝いの言葉にかえさせていただきます。ありがとうございました。

司会 坂田様、ありがとうございました。

【祝意披露】

司会 ここで祝意を賜っておりますので、一部ご披露申し上げます。

「神道六教派特立百三十年記念式典のご盛会を心から祝し、教派神道の発展と調和、更には本日まで参会の皆様のご活躍と御健勝をお祈り申し上げます」

神宮大宮司 鷹司尚武様より、ご祝意を賜っております。

なお、以下沢山の方々よりご祝意を賜っておりますが、お名前のみご披露させていただきます。

明治神宮宮司 中島精太郎様、東京大神宮宮司 松山文彦様、賀茂別雷神神社宮司 田中安比呂様、川崎大師平間寺貫首 藤田隆乗様、参議院議員 佐藤信秋様、衆議院議員 平井たくや様、衆議院議員 小池百合子様、以上の皆様方よりご祝意を賜っております。

【閉式】

司会 おかげをもちまして盛大に記念式典を開催することが出来ました。皆様方のご協力とあたたかいお言葉に感謝申し上げます。「神道六教派特立百三十年記念式典」を閉会致します。

皆様どうも有難うございました。